

2014年4月1日に京都薬科大学科学振興基金規程を一部改正し、科学振興基金が行う事業に、大学院生の海外留学を支援する「大学院生海外留学助成金」を新設しました。本事業は、大学院生の海外留学活性化を目的としたもので、留学期間3ヶ月以上1年以内の海外留学について150万円を上限として支援する助成制度です。

今回、本事業の支援を受けた2名の大学院生が海外留学を終えました。今後、彼らに続く大学院生の海外留学が活発に行われることを期待します。

■ 激論の先にあるもの



研究室にて
左Beck-Sickinger教授
右筆者

「議論好き」な国民性で知られるドイツに留学する中で私は、生産性の高い彼らの議論に、深い感銘を受けました。議論の中では、食い違う意見に対する頭ごなしな批判や安易な迎合をあまり目にしませんでした。むしろ、互いに分かち合える部分を見出そうとする、冷静な心と相手への思いやりが見えたのです。問題の本質に向き合おうとする彼らの真摯な姿勢は、パワーバランスに頼ったものとは違い、妥協や遺恨のない話し合いを可能にしているように思いました。実際、大人の喧嘩のような激論を交えた後は、ビールを片手に無邪気な談笑が始まります。当事者間で新たに生まれた共通の価値観は、立場を超えた未来志向の関係を築き、やがて絆を生むのかもしれない。対人関係の希薄化

薬学研究科薬学専攻博士課程4年次生 戸田 侑紀

ゆうき

する我が国を遠くから望んだ時、利害のないことにも一歩踏み込める、“おせっかい”な思いやりが行き過ぎた自由・個人主義を見つめ直す糧の1つにならないかと、考え浮かびました。

最後に、本留学にあたり経済面で支援して頂いた京都薬科大学科学振興基金および日本学術振興会、並びに留学先での研究・生活全般をサポートして頂いたUniversität Leipzig, Prof. Annette G. Beck-Sickingerと研究室メンバー全員に感謝致します。



ビール片手に談笑(研究室前にて)

■ イギリス研究留学

本学の研究・研修を目的とした留学制度を活用し、3～8月の6ヶ月間、イギリスにおいて研究留学をさせていただきました。ロンドン大学(UCL)School of Pharmacyにて、Simon Gibbons 教授よりご指導をいただき、研究を行いました。Simon先生の研究室には10人以上の博士課程学生が所属しており、その大部分

薬学研究科薬学専攻博士課程4年次生 松本 崇宏

が留学生でした。彼らは、ガーナやマレーシアなどから来ている学生であり、彼らへの指導やディスカッションを通して、様々な国の研究や教育について学ぶ良い機会となりました。加えて、修士課程学生に6か月間研究指導を行いました。指導に当たっては英語を使用する必要があり、英語の良いトレーニングになっ



UCLメインエントランス



研究室メンバーとのお別れ会

たと実感しています。

私はこれまでに他国の研究機関において研究活動を行ったことはありませんでしたが、本留学を通して日本の教育および研究レベルが世界的に見ても非常に高い水準であることを実感することができました。中でも、留学先と比較して本学では学部学生の期間においても研究活動を行うことができます。このことは進路選択において学生に多くの選択肢をもたらすとともに、幅広い視野を持った薬剤師の育成につながる方針であると感じました。

今回得ることができた人脈および知識を活かして、日本の研究や教育に貢献したいと考えています。また、多くの学生に本学の大学院生海外留学助成金制度を活用し、国際的視野を広げてもらいたいと思います。



ブレコンビーコンズ国立公園にて